

日印文化交流協定締結 50 周年記念  
「インドが三鷹にやってくる」、  
「日印文化交流の今日的意味  
——グローバル化の中の真の豊かさとは——」  
プロジェクト報告

宇野彩子

本プロジェクトは日印文化交流協定締結 50 周年を機会に、日印文化交流の今日的意味を考えるプロジェクトを企画しようという新津晃一先生の呼びかけで始まった。1990 年代以降の急速な経済成長を背景に、世界第 10 位アジア第 3 位の経済規模を達成したインドは、日本でもその存在感を大きく増している。これを受けて日印間の「戦略的グローバル・パートナーシップ」構築に向け、政治・安全保障、経済、科学技術、文化交流等の広範な分野におけるインドとの関係強化が政治レベルでも進んでいる。一方、日印間の人的交流は他のアジア諸国に比べて未だ限定的であり、相互理解の必要性も強く求められている。この現状の改善に向けて、国際基督教大学アジア文化研究所は 2007 年度の事業として、日印の知的な相互理解の推進を目指す標記のプロジェクトの主催を決定した。話し合いを重ね、その焦点を、グローバル化の負の側面——世界的な貧困、紛争、環境問題——を打破する方向性をインドのラビンドラナート・タゴールとマハトマ・ガンディーから学ぶということに置き、インドからガンディー主義者スダルラール・バフグナー夫妻、およびヴィシュヴァ・バーラティー大学（通称タゴール国際大学）の古田彦太郎氏を招聘し、国際シンポジウムを開催した。

同時に、今日多くの日本人にとってインドは「遠い」国であることから、シンポジウムに先立って、2つのテーマで公開講座を開催した。学生と市民を対象とした公開講演は 11 回行なわれた。テーマは多岐にわたっていたが、インドへの招きとなることが主眼であった。

実施日程については、公開講座テーマ 1 は 2007 年 5 月 2 日から 5 月 11 日の 4 回、公開講座テーマ 2 は同年 4 月 13 日から 5 月 31 日の 7 回、国際シンポジウムは同年 6 月 2 日に開催された。実施場所はいずれも国際基督教大学のキャンパスで行なわれた。

実施にあたっては幸い国際交流基金による助成を受けることができた。大学ではアジア文化研究所が主催し、「国際基督教大学 21 世紀 COE プログラム『平和・安全・共生』研究教育の形成と展開」も共催した。企画と広報においては三鷹国際交流協会 (MISHOP) が市民参加を広く呼びかけてくれた。インド大使館と三鷹市からの後援を受け、広報活動などの協力を得られた。インド大使館からは多忙を極めておられたヘーマント・クリシャン・シン駐日インド大使をお迎えすることができ、「インド年」のロゴの使用の許可をいただき、ポス

ターなどに用いることができた。その他、日印協会の『インド』やインド文化交流センターの『インド通信』にも広報をしていただいた。また、ヒマラヤの環境保護活動をされているバフグナーご夫妻の来日手続きにあたっては、日本山妙法寺のデリー道場や阿蘇道場の方々大変お世話になった。このように本プロジェクトの実現を可能にしたのは多くの方々のご協力によるものであったことをここに記し、各関係者に心から感謝したい。

## プロジェクトの具体的進展について

### 〈公開講座〉

#### テーマ1「変動するアジアにおける日印関係を考える」

1. 「21世紀におけるインドと日本」ヘーマント・クリシャン・シン（駐日インド大使）、司会：本郷好和（ICU 教養学部国際関係学科准教授）、挨拶：鈴木典比古（ICU 学長）、新津晃一（ICU 名誉教授、アジア文化研究所客員所員）2007.5.2
2. 「日印交流年への招き」野田英二郎（外務省参与「2007年インドにおける日本年」）2007.5.7
3. 「ガンディー思想を考える」宇野彩子（ICU 社会科学科非常勤講師、アジア文化研究所研究員、インド思想史）2007.5.9
4. 「これからの日印経済関係の展望」近藤正規（ICU 国際関係学科上級准教授、開発経済学）2007.5.11

#### テーマ2「インドの多様性と統一性」

1. 「日印交流の過去・現在・未来」新津晃一（ICU 名誉教授、アジア文化研究所客員所員、開発社会学）2007.4.13
2. 「ガンディー主義と環境運動——バフグナー夫妻のスワラージの追究」石坂晋哉（龍谷大学アフラシア平和開発研究センターリサーチアシスタント、アジア文化研究所準研究員、南アジア地域研究）2007.4.20
3. 「インド音楽入門」、「日本とインドの音文化」T. M. ホッフマン（天竺尺八奏者、日印音楽交流会代表）2007.4.27
4. 「インドと日本の女性問題比較」カマヤニ・シン（フリージャーナリスト、NHK 海外放送インド担当）2007.5.10
5. 「インドの歌と文化——タゴール歌曲」奥田由香（タゴール国際大学卒業生、タゴール・ソング研究家）2007.5.11
6. 「ラダビノッド・パル判事と東京裁判——歴史的な異議申し立て」ヴィヴェイク・ピントウ（『エコノミック・アンド・ポリティカル・ウィークリー』特派員、アジア文化研究所研究員）2007.5.17
7. 「グローバル化の進展に伴う環境保全運動：インド・ヒマラヤ地域におけるチプロ運動とダム反対運動」バフグナー夫妻（ガンディー思想に基づく社会運動家）

2007.5.31

公開講座においては2つのテーマを掲げ、テーマ1「変動するアジアにおける日印関係を考える」では、近年急速に政治経済の面で接近しつつある日本とインドの関わりを取り上げた。

まず5月2日のヘーマント・クリシャン・シン駐日インド大使の講演は大学をあげての企画となった。同時通訳が準備されたことによって、学長を始めとした学内の参加者のみならず、近隣の市民・学生も広く参加し、本学でのインド・プロジェクトを内外に知らしめることに成功したといえよう。インド大使は、国と国の関わりを実質的に成り立たせるのは人と人との交流であることを強調し、特に学生や教員の交換など大学間の協力を今後の重要な課題として指摘した。この大使の講演の様子は武蔵野ケーブルテレビで放映された。

5月7日の野田英二郎元駐印日本大使の講演は、2007年にはインドにおける「日本年」が開催されているがその具体的内容について、またインドと日本の文化的相違と互いに学び合うために必要な努力について示唆に富んでいた。

5月9日の「ガンディー思想を考える」(宇野担当)はガンディーから学ぶことが私たちにとって決して遠いことではなく、今、ここで自分自身から出発することを述べた。

5月11日の本学近藤正規上級准教授による「これからの日印経済関係の展望」では、今まさに大きく成長し変貌しつつあるインド経済とこれからの課題について膨大な情報を示しながら描き出した。

これら4回の公開講演は5月の始めに集中して行なわれ、学内での「インド週間」と連動していた。参加者は学生を中心に市民など毎回約70名の参加があった。特にインド大使の講演は大学関係者を中心に多くの学外の参加もあり、約90名の参加によって会場は立ち見も出た。インド大使は大変多忙なスケジュールをやりくりして来学し、講演会後の学長主催の昼食会では大学関係者と率直に意見交換をすることができた。

公開講座テーマ2「インドの多様性と統一性」はより長い歴史的展望からインドの多様性の一端にふれながらインド古来の伝統文化の根に学ぶことを目的とした。

4月13日に講演した新津晃一教授は2006年10月から2007年3月末までの6ヶ月にわたるタゴール国際大学での教員生活をふまえて日本とインドの長い交流の歴史を紹介し、本学での日印文化交流プロジェクトへ学生が積極的に参加することへの招きとなった。

4月20日の石坂晋哉氏は、映像、音声(歌や祈り)を用いながらバフグナーご夫妻の運動と思想的背景を紹介し、参加者に具体的なイメージを与えバフグナーご夫妻の来日を待ち望む契機となった。

4月27日のT. M. ホッフマン氏は、アメリカ出身の尺八奏者であるが、さらにアジアの音楽の源を求めてインドで古典音楽を学び、現在尺八によるインド古典音楽奏者として日印音楽交流の最先端に身を置いている。講演ではこうした実践に基づいて日本とインドの音楽

の比較をしながらインド古典音楽を紹介した。尺八と琴による実演も行なわれ、インド古典音楽に全く触れたことのない多くの参加者にとっても格好の入門講義となった。

5月10日にはカマヤニ・シン氏が若いインド人女性として日本で学び働いてきた経験を背景に「インドと日本の女性問題比較」というテーマで講演した。その力強いメッセージは、現状を変えるためには自分自身が声を上げていかなければならないというものであり、女性問題に限定されない問題提起として受けとめられた。

5月11日にはタゴール国際大学に約10年間留学し、師から直接タゴール音楽を学んできた奥田由香さんが、タゴールの生涯やタゴールの思想のエッセンスを表現するタゴール・ソングについて紹介された。最後に演奏しながら歌われたタゴール・ソングは大変印象深いものであった。

5月17日のヴィヴェイク・ピントゥ先生によるパル判事と東京裁判についての講演は、当時の政治的状況を踏まえ、その中でパル判事が自分の意見を述べるに当たっての信念と勇氣について紹介された。大変刺激的な講演であり、講演後には活発な質疑応答が行なわれた。

5月31日の講演は、バフグナーご夫妻によるガンディー主義的環境運動の真髓の紹介であり、自然を聖なるものと見るインド古来の文化に学ぶことへの招きとなった。また日本の若者へ、自然に学び、人びとに出会いながら、平和を掲げて歩くことを具体的提言として述べられた。講演に参加したある日本における南アジア史研究の重鎮は、講演後「バフグナーご夫妻を今日本に招いた国際基督教大学の見識に大変感心した」と感想を述べられた。

テーマ2の講演は学生が中心になって参加したが、市民や履修学生以外の学生も多く、いずれも約80名の参加があった。講演後にコメントシートを提出してもらったがその多くには講演を機会にもっとインドについて学びたいと思ったという感想が散見され、インドへの招きとして有効であったといえよう。

#### 〈国際シンポジウム〉

こうした二つのテーマの公開講座を踏まえて、6月2日には国際シンポジウム「日印文化交流の今日的意義——グローバル化の中の真の豊かさとは——」が開催された。

国際シンポジウム「日印文化交流の今日的意味～グローバル化の中の真の豊かさとは～」

於 ICU、ディッフェンドルファー記念館西棟多目的ホール

2007年6月2日 国際交流基金助成

開会挨拶 ケネス・ロビンソン（アジア文化研究所所長）

第1部 ガンディーとタゴールの思想

「ガンディーから見たタゴール」宇野彩子（ICU社会科学科非常勤講師、アジア文化研究所研究員）

「タゴールから見たガンディー——二人の真理観」古田彦太郎（タゴール国際大学講師）

「ラビンドラナート・タゴールと岡倉覚三（天心）」岡本佳子（アジア文化研究所準研究員）

「ラビンドラナート・タゴールと日本——詩人の洞察」（英語）ヴィヴェイク・ピントゥ（アジア文化研究所研究員、『エコノミック・アンド・ポリティカル・ウィークリー』特派員）

司会：葛西 實（ICU 名誉教授、アジア文化研究所顧問）

## 第2部 真の豊かさとは何か

「現代インドにおけるガンディー主義運動の実践例紹介」石坂晋哉（アジア文化研究所準研究員、龍谷大学アフラシア平和開発研究センターリサーチアシスタント）

「インド・ヒマラヤ地域におけるチプロ運動とダム反対運動」バフグナー夫妻（ガンディー思想に基づく社会運動家）

「あるガンディー主義経営者」本郷好和（ICU 准教授）

「インド、日本文化の交錯点としてのスワラージ(意味の追究)——マハトマ・ガンディー、田中正造と石牟礼道子」葛西 實

司会：新津晃一（ICU 名誉教授、アジア文化研究所顧問）

シンポジウムの問題提起は、現在展開しているグローバル化の深刻な負の側面は際限のない欲望の追求によって引き起こされており、その具体的な問題は深刻な貧困と世界的経済格差、国際的なテロリズムや紛争、地球規模の環境問題などに見られるが、この現状を打破する方向性を見いだすために、ラビンドラナート・タゴールとマハトマ・ガンディーから「真の豊かさとは何か」を学ぼうということであった。タゴールもガンディーも近代文明批判を展開し、欲望の拡大とは正反対の生き方によって真の心の自由を求めることを最重要課題として掲げていた。

シンポジウム第一部（午前）はガンディーとタゴールの思想の中核を人と人との交流から理解するということをテーマとした。まず主にガンディーから見たタゴールを宇野が取り上げ、二人は様々な見解や立場の違いがあったにも拘わらず生涯深い友情で結ばれていたがそれを可能にしたものとして、共通のヴィジョンへ向かって行動していたことということと、二人のヴィジョンを共有したもう一人の友人の存在について述べた。次にタゴール国際大学で教鞭をとっている古田彦太郎氏がタゴールとガンディーを豊富な映像を使用しながら紹介した上で、二人の真理観の相違について述べた。さらに近代日本思想史が専門の岡本佳子氏は近代における日印交流の草分け的存在としてのタゴールと岡倉覚三（天心）を紹介した。それを受けてヴィヴェイク・ピントゥ氏が来日したタゴールが当初は国をあげての歓迎を受けたが、その詩人の預言者的使命から発言した当時の日本を批判するメッセージによって、

全くの冷遇と無視へと変わったという事実をふまえ、そのメッセージは今日の日本や世界にもあてはまる普遍的な真理であると話され、最晩年のガンディーを励ましたタゴールの歌「ただ独り歩めよ」がそのエッセンスとして紹介された。午前部の質疑応答の中で明らかにされたのは、ガンディーとタゴールの思想の今日的意義は、変革の方法としての非暴力、環境問題や平和への取り組み、人と人との関わり合いの決定的重要性、などに集約されるということであった。

続いて第二部（午後）はまさに「真の豊かさとは何か」を主題としてガンディーの思想を取り上げた。まず、石坂晋哉氏がインドにおけるガンディー主義運動とバフグナーご夫妻を紹介した。続いてバフグナーご夫妻が自分たちが実践してきたガンディー主義にもとづいた環境運動について、特にそれが民衆主体の運動として展開し、果敢に現状を変革してきた原動力は非暴力であり、一人一人の魂（内なる力）を最も重視したものであることを証言した。そしてその力のみが貧困と戦争と環境汚染に苦しむ世界を変革する希望であると力強く述べられた。その後、本学の本郷准教授は、経済成長目覚ましい現代インドを代表する経営者の精神に生きるガンディー思想について紹介し、グローバル化の最先端にいる人物に指針を与え続けているガンディー思想の今日性を指摘した。さらに本企画委員の葛西實教授はガンディーの思想の中核にあるスワラージ（自由、意味の追究）のコンテクストとしての闇と光という現実理解について話し、現代は近代文明によって徹底的に闇の状況にありながら、光として生きる鍵としてのスワラージをガンディーは証言していたが、そこにおいて初めてガンディーの思想は普遍的であり、インドに限定されないと指摘した。そして具体的な例として、近代日本において言葉にならない苦しみを背負わされた民衆から学びガンディー思想の真髓を実践した人物として田中正造と石牟礼道子を紹介した。最後の質疑応答では午前部と午後部の両方の講演者を交えて、フロアからのたくさんの質問へ応答しながら、タゴール・ガンディーの思想の今日的意味が課題としての現状変革の方法としての非暴力、その実践を可能にする魂（内なる力）を育むことの重要性、そしてそのために不可欠な人と人との関わり、ということに集約されていき、参加者にとって意味あることとなっていたのではないだろうか。

このシンポジウムには約 190 名からの参加者があり、予想（100 名）を遥かに超えていた。またその参加者は本学関係者のみならず、判明しているだけでも弘前大学、東北大学、明治大学、創価大学、東京大学、東京外語大学、横浜市立大学、沖縄大学など様々な大学の学生や教員が参加しており、また近隣の市民も広く参加していた。また本学の卒業生が仙台や福島など遠方からも参加しており、卒業後も問題意識を持続させていることを示した。その他特筆すべき点としては、非暴力を柱に積極的平和活動を展開している日本山妙法寺（仏教）の宗教者や、自然農法の指導者として世界的に著名な福岡正信氏の弟子など日本で様々な分野で現状変革へ向けて新しいヴィジョンを求めて活動している人びとが参加していた。マスコミ関係では朝日新聞社と中外日報社の記者が参加し、それぞれ後日バフグナーご夫妻のイ

インタビューを行なったことからそのメッセージの重要性は着目されたと言えよう。

#### 〈レセプション・その他〉

シンポジウム終了後学内アラムナイ・ハウスで開かれたレセプション（夕食会）は、参加者全員にオープンであり、約70名の参加者があった。そこではシンポジウムで取り上げられた問題提起を継続して考えていきたい、そのためにこの出会いを大切にしたいという熱気を感じられた。一休みした後、ICU日本民俗舞踊部による古くからのお神楽と綾子舞いが披露され、その太鼓と鐘の響きは会場を浄化し、様々な相違を越えて参加者を結びつけた。その後飛び入りで古田彦太郎氏によるタゴール・ソングの熱唱や、福岡正信氏の弟子であり本学卒業生（9期生）である黒沢常道氏による「荒野に種をまき、樹を植えよう」という民謡とオカリナ演奏も披露され、このシンポジウムで語られたヴィジョンを夢として歩んできた先達の思いを共有する場となった。最後にバフグナー氏がここに招かれたことへの深い感謝の念を述べられ、被爆国日本こそ世界の平和に貢献できであろう、と述べられた。リラックスした雰囲気の中で参加者が互いに交流することができ、その後別れを惜しみつつ会は終了した。

バフグナーご夫妻は5月30日から6月7日まで本学キャンパス内のゲストハウスに滞在され、その期間中、NPO法人ネットワーク『地球村』やすでに言及した朝日新聞社や中外日報社の記者のインタビューを受けたが、さらに多くの学生に会いたいというご夫妻のご希望によって様々な学生が訪問して対話することができた。本学の学生のみならず、他大学の学生や三鷹市民もご夫妻の日常生活のお世話に協力し、そのことを通してお二人の人柄やシンプルで祈りに満ちた生活に触れることができたのは得難い経験であったと思われる。またお二人の長年にわたる友人で長く日印文化交流の架け橋として働いてこられたインド人仏教研究者ナレシ・マントリさんとの再会も私たちにとってこれまで知らなかった草の根の日印文化交流の真摯な営みについて教えてくれた。さらに一橋大のインド人留学生二人や、カマヤニ・シンさんなど日本で生活しているインド人との対話もそれぞれの心に残ったようである。バフグナーご夫妻が積極的にこうした機会を与えてくれたおかげで、公開講演やシンポジウムの中にとどまらない響きを残したと言えよう。

その他このプロジェクトに関連することとして特筆したいのは、このプロジェクトへの学生の関わりである。ICU日印文化交流学生の会は全体のアジア文化研究所主催のプロジェクトに連動する形で5月7日から11日を「インド週間」とし、インド映画の上映会を2回（*Bombay*と*Swades*）、バフグナーご夫妻の運動の紹介を1回、いずれもお昼休みに開催した。参加者は毎回約10名と小規模であったがそれぞれ熱心に参加していた。その他5月半ばにICUで身近な環境問題に取り組んでいる学生のグループOikosが開催していた環境週間のイベントに参加し、インドの環境運動とバフグナーご夫妻を紹介するという勉強会も行なわれた。

また、このプロジェクトと関わりをもっていて、現在も継続されている草の根の日印文化交流の実践について紹介したい。2007年3月にインドへのスタディーツアーを実施してタゴール国際大学を訪問したICUユネスコクラブの学生が選んで持ち帰ったタゴール国際大学付属小学校の子供たちの絵約50枚を「インド週間」期間中にICU大学構内で展示し、日印文化交流の試みとした。このインドの子供たちの絵は三鷹の小学校など7カ所で展示された。ICUユネスコクラブの学生は小学校を訪問してインドについて紹介する「出前ワークショップ」も行ない、子供たちに大変貴重な経験を与えた。これらの絵はその後、三鷹国際交流協会自主グループスタディーツアーの会(MISHOPSTG)が実施するインドスタディーツアーが8月末にタゴール国際大学を訪問した際に返却されたが、その際にお返しとして三鷹の小学生の絵や作文が持参され、この日本の子供たちの絵の返却の際にはさらにインドの子供たちの絵が贈られている。この小学生の絵や作文による文化交流のプロジェクトは現在も継続されている。

以上のように実施された本プロジェクトは当初国際交流基金に提出された計画とほぼ変更はなかったが、報告すべき変更は一点ある。一つは6月1日に予定されていた古田彦太郎氏とタゴール国際大学からの学生グループによる「グローバル化時代における日印関係」についてのプレゼンテーションがとりやめになった。これは計画を作成した時点ではMISHOPSTGがタゴール国際大学の学生を招いての日印文化交流プロジェクトを計画していたので、その学生たちと本学の学生の対話の場を作りたいということで計画したが、残念ながらこの招聘プロジェクトが実施されなかったためである。インドの学生とICUの学生の対話の場が実現できなかったことは大変残念であったが、今後の課題としておきたい。代わりに6月1日には古田氏がインドから持参されたタゴールとガンディーの友情についての感動的なドキュメンタリー *The Poet and the Mahatma* (2006年制作) を上映しシンポジウムへのプレ企画とした。

以上のように今回のプロジェクトは学内でこれまで例を見ないほど長期間行なわれ、大規模なものであった。そのクライマックスとして来学されたバフグナーご夫妻は、インドの香りを運んできた、というのが葛西教授のコメントであった。当初から掲げていた呼びかけとして「インドが三鷹にやってくる」という言葉を用いていたが、バフグナーご夫妻が本学で講演し、祈り、歩かれたことによってこの言葉は参加者にもまさに実感として感じられたであろう。

どの講演も参加者が多く、学内に限定されず学外からの参加者があった。また、講演後のコメントシートや質疑応答からも参加者にとって有意義であったことが示されている。参加者は学生や研究者など学問的関心を持つ人びとはもとより、一般市民、平和活動を展開しているNGOや宗教団体、環境運動のグループに属する人びとなど多彩であったことから今後の影響の広がりも予想以上となることが期待され、当初の目的以上の成功を収めたと評価している。



ただ、このプロジェクトの中心的問題提起である「グローバル化の中の真の豊かさとは」というテーマについてシンポジウム参加者の中で十分に論議できなかったのではという全体的反省が新津先生から提起された。こうした問題意識に応えるべく、このプロジェクトの企画に中心的に関わったメンバーによる座談会を12月16日に行い、その成果を別冊17号に掲載することとした。

この企画を通して互いに会った人びとが継続的にインドと対話し、「グローバル化の中の真の豊かさ」とは何か、という問題を自分自身の問題として考える場を今後も企画していきたい。インドから広げてアジアの他の地域を視野に入れて「グローバル化の中の真の豊かさとは何か」という問題提起を継続して検討できることを願っている。また今後もガンディーやタゴールの思想の今日的意義について学生を交えての研究会を継続したいという希望があり、規模は小さくても持続していきたいと考えている。

最後に企画段階から実現に至るまで企画委員会を支援下さったICUアジア文化研究所のメンバーとスタッフに心から感謝を記しておきたい。さらにこのプロジェクトをゼロから立ち上げて構想を作り実現に至らせた新津先生の発想力とたゆまぬ努力に驚きと感謝を記したい。またこのプロジェクトの印刷物のデザインや作成において、細々としたあらゆる雑務に多大な貢献をしてくれたアジア文化研究所準研究員の戸田真紀さんに感謝を記しておきたい。